

科目名	人間学総論		副題			
担当者	佐伯 胖					
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1年次	
授業の概要	本講義では、人類の進化をたどることから、なぜヒトは「ヒューマン」（人間の「人間らしさ」を備えた存在）になれたのかをたどり、そこから、人間の「社会性」、「言語」、「教育」の起源と展開を見てゆく。次に、人間の本性として備えた特性を、一貫性、効用性（最適性）、相互性（開放性）、審美性の4つの側面に焦点を当てる。そして教育において子どもを「人間としてみる」ということについて、①教育と「人間観」、②「教える」ことの恐ろしさを踏まえて、③倉橋惣三の「育ての心」を再考する。最後に、「人間」研究の在り方について、客観性神話からの脱皮、擬人的認識論、そして「二人称的アプローチ」について検討する。					
授業のねらい・到達目標	1. 「人間」とは何かを探究する。 2. 人間が「人間である」ということの特長を押さえ、「人間であること」の尊さを実感する。 3. 「人間学」を踏まえた教育の在り方、人間研究の在り方を探究する。					
授業の方法・授業計画						
1	人間の進化（1）―なぜヒトはヒューマンになれたか					
2	人間の進化（2）―「社会性」の起源					
3	人間の進化（3）―「言語」の発生と進化					
4	人間の進化（4）―「教育する」ということ（「アマラとカマラ」説再考）					
5	人間のモデル（1）―「一貫性」を求める					
6	人間のモデル（2）―「効用性」を求める					
7	人間のモデル（3）―「相互性」を求める					
8	人間のモデル（4）―「美しさ」を求める					
9	子どもを「人間としてみる」ということ（1）―教育と「人間観」					
10	子どもを「人間としてみる」ということ（2）―「教える」ことの恐ろしさ					
11	子どもを「人間としてみる」ということ（3）―倉橋の「育ての心」再考					
12	「人間」をどのように研究するか（1）―「客観性神話」からの脱皮					
13	「人間」をどのように研究するか（2）―「擬人的認識論」入門					
14	「人間」をどのように研究するか（3）―「二人称的アプローチ」入門					
15	まとめ―「人間学」とは何か					
期末						
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成、グループ・ディスカッションなどで積極的参加を求める。					
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート（60%）・発表等（40%）を基にして評価する。					
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後には授業内容の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。					
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。					
テキスト	佐伯胖 『認知科学の方法[新装版]』、東京大学出版会、2007年 佐伯他 『子どもを「人間としてみる」ということ』、ミネルヴァ書房、2013年 V. レディ著佐伯訳『驚くべき乳幼児の心の世界』、ミネルヴァ書房、2015年					
参考文献	NHKスペシャル取材班 『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』、角川書店、2012年 長谷川寿一・長谷川真理子 『進化と人間行動』、東京大学出版会、2000年 佐伯胖 『イメージ化による知識と学習』、東洋館、1978年 佐藤慎司・佐伯胖編著『かかわることば』、東京大学出版会、2017年					